



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1932, 18(4): 317-322

ISSUE DATE:

1932-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184086>

RIGHT:

グは氷河に蔽はれた期間が短く、現今極めて小規模な氷河が造つて居るに過ぎないが、明瞭な氷河遺跡を持つて居る。此の點でも、アルプスやヒマラヤよりも遙に日本アルプスに近く従つて其の研究が日本の氷河問題の解決に有力な鍵を與へるであらうことを著者は力説する。

本書の後半に入つて著者は日本アルプスなる名稱の起原を考證し、北、中央、南アルプスに就て概説し、或は英人による日本アルプスの早期探検や著者の體驗を述べる。次で日本アルプスの特徴は美しい森林、清冽な溪水、純美な萬年雪及び美事なカル帯にあることを説く。更に進んで八〇頁を費して日本アルプス雪蝕地形論が書かれて居る。之に於ては先づ日本に於ける氷河問題の沿革を説き、諸家の所説を紹介し次で其等の説を検討しつゝ、諸種の氷河遺跡、地形を説述し結局日本アルプスに於て氷河の遺跡や氷河の地形と認むべきものがないと斷じ、最後に雪蝕を説き、日本アルプスのカアルが雪蝕によるものとの決論を下す。其の決論の是非は兎も角として、其の所論堂々として専門學者の鼻を靡して居る。

本書の最後の數十頁は著者の少年時代以來仰ぎ崇めた不羈の高根に主として費されて居る。それは歸朝以後の登山紀行であり、新に得た感想を録したものである。其の後に八ヶ岳高原、お札博士の富士山講演、木曾街道の錦繪の三章があつて本書は終る。

以上の如く本書の内容は豊富、有益であり、興味が深いも

のである。其の文章は何しろ名文家の著者の事故、流麗なことは云ふまでもない。本書の印刷は良く、誤植は全くない様であり、装訂は美しい。本書に關して特に言ひ落してはならないのは美しい寫眞版が多數あることである。其の中には主としてキヤスケード諸山及びヨセミテの氷河及び其の遺跡地形のものが最も多い。

要するに本書は山岳家の必讀すべきは勿論として、山に興味を有する地學愛好者の一讀すべき好書であることを信ずる。(M)

雜 報

○カナダの人口

一九三一年五月三十一日—六月一日施行された國勢調査の結果によるとカナダの人口は一〇、三七四、一九六人にして一九二一年以來の増加百五十萬人である。各州の人口數を一九二一年のものに比すると興味ある増減が見られる。四州を除いた凡ての州は五%から三〇%の増加がある。人口少きユーコン・テリトリイでは僅に七十三人を増したがプリンス・エドワード島、ノヴァスコシア及北西地方では皆人口減少を示し、最後の地方では減少すること一〇%以上に達した。ケベックは増加數最も大にして五一三、〇五六人の増加あり、之に次ぐはオンタリオの同じく四九八、〇

二一である。人口數の最も減じたのはノヴァ・スコシアで減少數一萬一千人である。

○朝鮮の漁村

昭和五年調査に據ると朝鮮の漁業戸數は八萬七千六百八十一戸（内地人三千百三十三戸、朝鮮人八萬四千五百四十八戸）、養殖業戸數二萬四千二百三十六戸（内地人七十九戸、朝鮮人二萬四千百五十七戸）、水産製造業一萬一千九百七十四戸（内地人七百三十八戸、朝鮮人一萬一千二百三十六戸、水産販賣業一萬七千五百九十二戸（内地人一千三百六十八戸、朝鮮人一萬六千二百二十四戸）、合計十四萬一千四百八十三戸（内地人五千三百十八戸、朝鮮人十三萬六千六百六十五戸）にして沿海漁業の大部分はその地方沿岸漁民によつて行はれる。由來沿海地方は人口密度が高いが、殊に併合以來漁業の發達に伴ひて漁村の繁榮は極めて著しく、從來名もなかつた沿岸に一大漁村を出現し、數年前までは僅に數戸の漁村に過ぎなかつたものが、今では繁華な市街地となつて居る例は枚舉に遑ない程ある。漁業戸數の大部は八府と五百三十二面とに亘つて點々數十戸乃至數百戸の部落を爲して集團し、主として漁業を以て生計を支へ、中には半農半漁の生活を營むものもある。漁村を有する臨海地方の人口密度は大正十四年十月一日現在國勢調査の結果に據ると一方里平均人口は江原道即ち南部日本海方面の千百三十五人より慶尙南道即ち對馬海峡方面の三千四百二十三人の間にあつて海岸線の屈曲甚だしく良港多く、漁業の盛な對馬海峡方面及

び全羅南道即ち多島海方面が人口密度が高く漁村の發達が著しい。而して漁村の發達した地方には漁業組合が組織されてゐる。又漁村には内地人漁業者の移住したものも妙くなく、出身地によつて、廣島村・岡山村・香川村・愛媛村などと呼ぶものもある。彼等は朝鮮人に比すると漁船・漁具・漁業の方法及び取引狀態が進歩して居り、團體的統制がよく取れて居るので、その移住によつて、原住漁民を刺激し漁村を發達させたことは極めて大である。朝鮮の島嶼・沿海は漁業期節には非常に活況を呈し、内地及び鮮内各地から臨時に多數の漁業者及びこれを日常でに商人等の入込むを例とする。昭和五年中に於ける調査によると漁夫三千人以上の通漁者が集まつたのは全羅南道靈光郡蜆島面雄島里・同道高興郡蓬萊面新錦里・慶尙南道迎日郡滄州面九龍浦里・慶尙南道蔚山郡東面方魚津・黃海道海州郡松林面大延坪里大延坪島・同道同郡松林面大睡鴨島里大睡鴨島・同道魏津郡興嶺面峇岩里峇岩洞・咸鏡南道北青郡新浦面の馬釜島等で漁期には漁港及び漁村は遽かに股賑を呈する。而して氣候及び潮流等の關係から鯖・石首魚・鰺・鰯等の漁業の種類により盛漁期の漁場が或は半月乃至二十日位で各方向に移動し、これに伴つて漁業者中には漁場を逐うて通漁するもあり、これに附隨する商人等も其の後に従ひバラック建ての日用品店・飲食店・湯屋などの轉々移動し行くものも多かつた。然るに近來は漁港及び漁村の發達と漁獲物の沖賣買が盛んになつてこの種臨時商人の活動は漸次衰退する

傾向がある。僅に數年前までは方魚津や甘浦や九龍浦の如きも通漁部落に過ぎなかつたのであるが、今日では定着漁業者によつて立派な漁港市街を形成して居る。然しながらこの數年間の不景氣と漁業の不振により各地方とも漁港及び漁村の疲弊は甚だしく嘗ては盛漁期に飲めや唄へで、絃歌さんざめいた地方も今は火の消えたやうに衰微したのもあり、當面の窮狀を救済する必要に迫られた程漁民竝に一般商人は窮境に陥つて居る。従つて漁港の改良、交通機關の整備、漁獲物の價格維持、水産品製造工業の經營等、漁業經營の振興を計るべき餘地が尠くない。「朝鮮」所載善生永助氏朝鮮の漁村部落に據る。

○紀伊水道附近の海底地形

紀伊水道附近の海深圖

で注意を惹くのは(一)室戸崎沖東方にある土佐鰯の形(二)土佐鰯の北方に東から西に向つて入込んでゐる千四百米以上の深み(三)及之と直角に北方水道の中央に向つて入込んでゐる顯著な海谷である。この海谷を紀伊海谷と呼ぶ。土佐灣には奈半利川と四萬十川の谷の延長をなす二つの溺谷がある。矢部博士によると日本諸島は現今より餘り遠くない地質時代に今の四百尋(七三〇米)の等深線を海岸線として居たことがあつて上の二つの海谷は當時の陸谷が溺れたものと見られてゐる。紀伊海谷は土佐灣の二つの海谷とは違ひ、其の大きさも大きく、深さも深く千二百米の等深線もかなり北に入込んで居ることは注意に値する。其の二百米以淺の部分は淺海の底質

で被はれてゐる爲め海谷の形を認めることが出来ない。然し谷底の線の走向から見て北東に日高川に連なつてゐる様にも思はれる。又この海谷は寧ろ海渠に屬するものではないかとも思はれる。土佐鰯は又阿波礁とも謂はれ、初めて大正四年に報告され、其の後大正十五年軍艦滿州により、昭和二年軍艦大和により測量せられたが其の南側は測量が未だ不十分である。其の形は東西に長く、今七百三十米の等深線を假に海岸線と見るとこの島形の部分は室戸崎南方の臺地と淺い海峡で隔てられてゐる。土佐鰯は猶現在四個の二百米以淺五十四米に至る頂を持つてゐる。室戸崎南方の海底の傾きは一樣でなく陸岸を距る約十九軒深さ二百米と四百米間と陸距三十四軒深さ六百米と八百米との間とに於て急傾斜をなして段が二箇所にあることが目に付く。又室戸崎の東側沖合と和歌山縣富田川の沖合とは比較的急斜した所がある。底質に就て一言すると室戸崎南方の海底臺地では二百米界線以内は岩多く六百米近くでは細砂を得てゐ、土佐鰯の西側には多く礫を發見する。これ等のものの存在は可成りの深さ迄黒潮が洗ふことを暗示してゐる。室戸崎南方と土佐鰯附近の海底地形が黒潮の流れに相當影響を與へてゐることも亦想像するに難くない。(水路要報九月號所載重松大佐の紀伊水道附近の海深に就てに據る)

○チリ硝石

チリ國唯一の財源だと考へられた硝石

も近頃は人造窒素肥料の生産激増に押されて前途樂觀を許さ

いるものがある、従前硝石採取の多くの會社があつたが一九三〇年以後チリ硝石會社といふ一會社に合併して、合理的に經營をはじめた所が、その設立に要した資本は海外國特に米國より借款してその借金の一部が一九三二年六月満期となるので償還するか借換をしなくてはならなくなつた所、米國財團は硝石の前途を悲觀して、同社並にチリ政府の保障に満足せず、こゝで會社を立てかへねばならぬやうになつてきた。蓋し會社現有流動資産九三六、一〇〇〇弗は右の一九三二年六月に支拂ふべき九六三、三〇〇〇弗を支拂ふに不足するといふ状態であつて、しかもその流動資産とは手持硝石二百萬噸以上といふのである。所がこの手持品がきつぱり賣れないのであるから會社は行詰つたのである。

實は近時各國の人造窒素肥料の生産が増加したために、歐洲各國はその産業保護のためチリ硝石の輸入關稅を引上げ、門戸閉鎖をやつたと同時に、最大の需要國であつたフランスがドイツから人造肥料をかうやうになつたのも大なる原因で自然チリ硝石は價格引下げをやらねば競争が出来ぬやうになつたのである。しかしチリ硝石は現在これ以上に格價を引下げては生産費に喰込むのである。

一九三一年七月チリ革命後一般國民は前大統領イバナスチリがチリの生命産業たる硝石業を外國資本家の設立せる一チリ硝石會社の獨占にしたことを以て國を賣つたものだ攻撃した、そこで革命後の政府は議會にこの問題を調査せしめた

ところ右の會社を解散すべしといふことになつたが、たとへ前政府といへどもこのことは對外的に不可能であつたから、そのまゝになつてゐる。ところが一方人民は、合理化の經營のために失業が増加したから、どうしてもこの會社を解散せよと叫ぶものが多い、政府も策の施すべき所をしらないので行政上の不安が去らぬ、猶更米國の財團は返還資金の借換に應じないので、會社は行きつまつてきた。そこで手持品を賣捌く間だけ、生産停止をしやうかと考へるが、もしこれを行へば失業問題が起つてくるので何とも出来ない。

世界第一のチリ硝石はかうした事情の下に今は行詰つてゐる、天産の豊かなといふことだけが頼にならぬ時代ができたのである。

○愛知地理學會報告

第十回例會 昭和四年六月卅日 愛知縣第一高等女學校

一、滿鮮旅行を終へて 稻垣健太郎氏

一、上高地盆地と四近の地形地質について 岡田 鎮太氏

第十一回例會 昭和五年一月廿日 豊橋市高等女學校

一、臺灣及揚子江流域に就て 和田 彌内氏

二、琉球の歴史的考察 渡嘉敷唯昌氏

第十二回例會 昭和五年三月一日 愛知縣女子師範學校附屬

小學校

一、伊豆半島頸部地方の文化の發生的考察 耕崎 正男氏

二、日本のデンマーク(映畫を加ふ) 高井 銈治氏

第十三回例会 昭和五年六月廿九日 名古屋高等工業學校

一、地理學習についての機械器具 教授 河津 彦一氏

第二回臨時會 昭和五年十月十五日 愛知縣第一高等女學校

一、都市の人文地理的考察 石川 榮耀氏

第十四回例会 昭和六年一月十八日 山口尋常小學校

一、北伊豆の震災地を巡りて 岡田 鎮太氏

二、破壊的決果より見たる北伊豆大地震の性質及震源の所在 耕崎 正男氏

第十五回例会 昭和六年四月十八日 花ノ木尋常高等小學校

一、木曾谷について 武市 雄嗣氏

二、熱田魚市場について 伊藤文四郎氏

三、土佐に於ける水稻の二期作について 耕崎 正男氏

第十六回例会 昭和六年六月十四日 愛知縣第一師範學校

一、名古屋五十景について 服部菊三郎氏

二、鍋屋上野町の郷土に就て 奥谷六三郎氏

三、辻村太郎氏著日本地形誌一覽表 橋本 孝平氏

四、臺灣及中部支那に就て 岡田 鎮太氏

第三回臨時會 昭和六年九月十三日

一、名古屋港の現況と將來 港務所庶務課長

○享保以後の地理關係出版書目 大阪(四)

書 名 畫 工

備中國大繪圖 一冊 古川平次兵衛

(備中國岡田村)

後ランチにて港内一巡見學

二、中川巡河の閘門の實況見學

第十七回例会 昭和七年二月十四日 名古屋第二高等女學校

校及大日本人造肥料會社

一、名古屋の電力に就て 島崎 哲夫氏

二、人造肥料について 島田 佐一氏

後、工場見學

三、獨逸(貨客)船見學

第十八回例会 昭和七年四月廿日 愛知縣第一師範學校

一、修正小學地理書の一部に就て 耕崎 正男氏

第四回臨時會 昭和七年五月廿二日

一、白鳥野木場に就いて 大石 良恭氏

後、白鳥野木場見學

二、白鳥御陵及斷夫山古蹟見學

三、日本車輛製造株式會社見學

第二回講演會 昭和七年六月廿六日 愛知縣第一高等女學校

一、滿洲國の地域的發達と其の經濟區

彦根高等商業學校教授 田中 秀作氏

板 元 出 願 許 可

油屋宇兵衛(津村東ノ町) 文化二年五月

文化二年八月二日

廿四輩順拜圖會 後篇 五冊

【附記】 本書板行の義出願したるも、同年八月十一日に至り、開届けられず却下する。

小刀屋六兵衛(津村東之町)

文化二年五月

廿四輩順拜圖會 後篇 五冊

【附記】 本書は文化二年八月十一日却下せられたるを、閏八月上本を更め出願許可せられるものと思はる。

小刀屋六兵衛(津村東之町)

文化二年閏八月
文化二年十一月十九日

唐土名勝圖會 六冊

【附記】 本書は文化二年八月十一日却下せられたるを、閏八月上本を更め出願許可せられるものと思はる。

（故人）鳥飼洞齊

河内屋吉兵衛

文化三年二月
文化三年三月五日
文化三年六月
文化三年九月二十六日

改正日本輿地路程全圖 折本 一冊

長久保赤水(水戸)

藤屋彌兵衛(高麗橋一丁目)

文化三年九月
文化三年九月二十六日

親鸞聖人二十餘輩順拜記 一冊

秋里薩嶋(京都)

小刀屋六兵衛(津村東之町)

文化三年九月
文化四年三月十三日

京都指掌圖 一枚摺

西村中和(京都)

小刀屋六兵衛(津村東之町)

文化八年三月
文化八年七月十四日

紀伊國名所圖會 前篇 五冊 丁數二百

帶屋伊兵衛

河内屋太助(唐物町四丁目)

文化八年四月
文化八年七月十四日

紀伊國名所圖會 二篇 五冊 丁數二百

帶屋伊兵衛

河内屋太助(唐物町四丁目)

文化八年十一月
文化九年六月

早見京繪圖 一枚摺

西村中和(京都)

小刀屋六兵衛(津村東之町)

文化九年十一月
文化十年七月四日

五畿内産物圖會 五冊

新板賣弘申出

河内屋太助(唐物町四丁目)

文化十年十一月

道中早繰細見圖 一枚摺

【附記】 古賣弘人よりの申出でを、本屋行司にて開届け板行。

吉文字屋市右衛門

文化十年閏十一月
文化十一年正月

四國名所圖會 阿波之部 (二冊)

布屋喜兵衛

河内屋太助(唐物町四丁目)

文化十一年九月三十日